俗說辨　六婦女

1 3
1834
6

イ3 1834 6
イ5 1271 6

# 本朝俗説辨六目録

## 婦女

一 松浦佐用姫望夫石となる説
一 中将姫継母の讒によりて雷山に捨らるゝ説
一 小野小町髑髏面乃歌式説付 面造小町乃説
一 玉藻前殺生石となる説
一 常盤腹おまき墓として敬さるゝ説

一 堀川殿付乃時静長刀とりて働く説
付 静形長刀の説
一 佐殿庄司が後家義経よあへる説
一 義乃母をぐまきさみ説



本朝俗說辨六

婦女

○松浦佐夜姫望夫石よなる説

俗説ニ云ふ。雲浦佐用姫を大伴佐提彦連が妾なり。佐子比古勅をかうむり唐よりくだりしとき。佐用姫をのこしてと行くこと。ひとのがれ領巾をふりてあまをまつ。さ。姫この あまり。終に死してこれとなる。是を望夫石となづく

今按ふに。佐用姫が石よ他〳〵ろ事。正史実録世ことの撰集ものつくりそえなど。第墓集よ山上憶良が領巾麾嶺歌乃序よ大伴佐提比古勅令とかうむり。藩

國より使をもて妾松浦佐用姫うつくしきこゝろよ
のゝりをうふふ船をちこ領巾をねぎてこれをまゝく
ひそうしてはひをひき麾の嶺とゝのぼりてをかうち
ふりて人雲浦佐用姫はまでひよ
ひまゝうちおへふこゝろ名。按をろうゝ名にて
ふくろのゝなり とあまども。
ゝよ化せることゝ。又望夫石といふこゝの和漢甚あり。
程伊川の説よ。望夫石ハ山ぐ見江山を望ことく石人乃
形のごとき者あり。今天下九州ことゝ此ものあり
ゝ。則呼で望夫石ととゝ。二程全書にゝくゝ。見を
ゝりゝく俗説乃誤とをゝるべゝ



○中將姫継母乃讒よりて雲雀山よ捨らるゝ説
俗説よ。中ゝ姫ゝ捨風ゝ大臣藤原豊成百因縁集よハ尹統と記を
姫ゝ母死ゝ後ゝ成又妻を娶ゝ。彼妻姫をゝくゝ。
よ憎ゝまれゝ。ゝを成家人よ命じゝ。和州雲雀山 左宇田郡ニよ
おゝゝく。姫殺さゝめんとゝ。家人ゝ絞をゝ志のびゝ。ゝよ
居をむとゝびてゝあれよ居ゝむ。ゝ後豊成ゝよ狩ゝゝ彼
庵よ入り。姫をゝゝく相具ゝゝゝ人ゝ。姫世乃妻を訴ゝ。母
の怪世を呼ゝんゝめゝ。尼となりて當麻寺よ入蓮絲を
りゝく曼陀羅を織とゝ
今按ゝよ。續日本紀を考ゝゝよ。ゝを成ハ不比等の孫。武智

麻呂乃子恵美押勝が兄なり。押勝が乱よりて。ゆえ成
も天平寶字元年七月二日より。太宰府小謫せらるゝ。同
七年六月。中將姫十六歳にて。わかゝ。麻の彌林寺より
入りて尼となり如法となづく。姫が母は百能と云ひしも不
比等の孫麻呂つぐ乃子なりて。ゆえなくして流兄弟なり。姫が難
繁より二十年以後延暦元年は百能死せり。つゝしみ
姫継母乃法よりつくゑ崔ごとてらまゐ成り達て
厚宅〳〵尼となれるとい大なる猛なりゝ。ゆえなくして
太宰府ふうつさま。叔父押勝を殊せらるゝ。豆郷の
引となりて難繁せるものなるべし

○小野小町繁鶏ぐへ乃說付並造小町の說

俗說に小野小町を生羽郡小野良實が女として陽成帝
の妃女となる。甚だ容姿あり。歌を能せり。海より粗
氣しくそ食となり。逢坂の関寺に墓をむもそび。
往来の人よりものを乞て居るとゝろ。帝御家といふ者
を勅使として雲乃上よりありしむるに。小町ゝ稱どゝ
ぞれ乃肉やゆゝしきといふ所繁をゝゞたまりまれど。
小町ゝ乞れ上いあるゝ〳〵むゝにゝ稱どゝ〳〵むゝまの内
ぞゆゝしきと。我父字ぞゝりにくあゝむゝゞ〳〵とあり
ゆゝつゝ。又小町を造乃名ゝ空海よりて問答乃ことば

あり。空海ゆきを記してみ造小町と号し。今世ゆ小町と云。
今按ずるに小町が艶詩ども〳〵の哥世を乃選集小町家集
をもかつてなし。但し古今著聞集十訓抄寝覚記に少
納言通憲信西が子成範桜町中納言配所にうめ〳〵かへされる。
内裏へまゐりうるとろこにむうしの女房のつりさちよて
あり〳〵人の今はさをなるまれぞ。女房乃中より昔
とゝひいで。やれうへるあるこむうしにかゝる孫どに
やうきのうちや意〳〵さとゝみく出〳〵うるとゝ。あるが
ぜんとゝくとゝうろ乃さうふうちゝうまるに小松内府重盛
まゐりるひろれだいそぎさゝとくとゝて。どう孫の内れさ



あぎ本のゝ〳〵にゝくやゝ文字とゝゝそぐお。老文字
とゝさてみとゝ乃うゝへさゝいまゝくおゝられゝゝり。女房とゝて
ゝゝゝ小。ぞゝ空ゝて。ゝゝれゝゝゝとゝゝり。このまゝと
ゝくゝりあゝゝたゝゝく。ゝまゝゝゝ事とゝゝるゝゝ。又小町老
衰乃後空海ゆあゝく問答の語を空海ゆゝくゝ出
遣小町と号ゝゝとゝいへゝゝゝ。性靈集ゝもゝくゝゝゝ。ゝゝゝ
小町ゝ空海と時代大ゝゝ異なり。大系圖を考ふゝ。小
町ゝ小野篁が孫ゝゝく。出羽ゝ良実が女なり。釋書真
言傳弘法傳記を考ふゝ。空海入定ゝゝ承和二年なり。
それゝり十八年を経ゝく。仁寿二年十月ゝ小町が祖父

當年もはや七十一歳と。文徳實録にみえたり。小町もこゝを縁
なれバにや。けしきとさ二十すぎをもまだみえぬれども。うきさびしく海が
入定乃年ごろより。漸くうちまれらなるべし。江家次第云。
在五中將為犯件后二条后高子出家相構之後為生髪至陸
奥國。向八十嶋求小野小町尸。夜宿件嶋。終夜有聲曰。
秋風之吹仁付天毛 故事談東齋隨筆にハ。秋風乃吹るたびごとに少し あり。鍛雙子にハ秋風のうち吹ごとに あり 阿
那目阿那目。後朝求之髑髏目中有野蕨。在五中將涕泣曰。
小野止波不成薄生計里 無名抄云。小町 といへりとある 即歛葬。袖中抄云。小野小町數十年在京而好色也。然歸本國死去故屍在八十島歟 とある。業平ハ元慶四年に卒去と
三代實録にみえねばこそ。さらに陸奥にゆきましてあ給ふ。小



町が死せしは色女より。まだ年数をなりければ。それで四十餘歳
ましなからん。然るにときハ老衰乃從それ張あるまじき也。
又玉造小町は十七歳而喪慈母十九歳而殯慈父二十一
而亡兄二十三而死弟とあまりたる也。小野系圖には小町が姉
一人のミあるて兄弟乃なきぞ。されバ後世好事者。此篇を
擬作して小町と空海と結ひあつる記せしなり。世
人謬傳へて小町老衰して狂女となり。乞食して世をあ
よあへりなどいへるべし。信をおくにたらざる事明なり

○玉藻前殺生石となりし説

俗説に。近衛院乃侍女。玉藻前野干となりて。下野國那

須磨に飛さるぞこれによりて三浦介上総介に勅を下しける。彼野干を殺さしめらましに其魄ゐもろまちにてとゞまれり。あれによりて禽獣必斃死をなづけて殺生石とよぶ。その後玄翁といふ僧きたりてこれに一夜座禅し偈を唱へ払子をもつてこれをうちくだくといふ

今按ずるに妄説なり。ぞとして彼那須野の殺生石は砒石なるゆゑにふるく禽獣斃れ死するゆゑに性をこのむ虫豸殺が事を作ておしならびて後人又玄翁法師が事を附会せるなり。実録にかつてみえざることなりて是を謬とおもひ殺生石のことに於ての奥州会津盤梯山なる毒石ありてこれに触るるものはかならず死す。なづけて人捕石といふ。紀州高野の玉川なるも毒あり。空海人の飲むことを忌て

「わすれても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水

とよめるも。飯の類蛇草木魚虫水土ともに毒あること。おほく和漢の書にみえたり。おほむね此等がたぐひなるべしや。

○常盤前去墓にて殺さるる説

俗説に常盤そは源義朝の妾にて義経の母なり。義朝死の後平清盛入道の妾となれり。牛若鞍馬を忍び出て奥州にくだるに清盛入道これをいかりて常盤を追いてくだるべきをなくしてて牛若のもとをたづね奥州へくだりて

濃州墓ゝく盜賊よあらさ〳〵とつひ傳へ今に墓あり。
こゝをとゝ中夢盤といふ
と按ふるに此事いにしへの書にもなくこそ平治物語に夢
盤法盤にゝゝれて姫一人まうきゝゝ〳〵ぞとさめゝゝし
て侍る。條の大蛇に長成乃小方よりなりてゆくも物多
出来りとゝる盛衰記よりは此の子夢盤婆に侍る義成
とゝくゝ〳〵ぞ新官義經記朝よ中ゝゝ〳〵して西国よ落ゝ
阿。義成も侍よ侍さて折ゝゝ〳〵しぞ。大物乃浦ゝてちりぐく
ふなり。和泉国小落かくふゝとゝ。あきとゝゝゝよ夢
盤ぞ侍よ長成の書ふるふまをゝ〳〵ざるふ者半多



奥別下向乃ゝゝさかくゝゝやゝゝまんと想像して安作〳〵
まゝゝ伝へ〳〵まりゝく實ゝ。他人乃墓なぞ成あやまり
て夢盤ぞ墓といふなるべ〳〵
○堀川兼討の時静を刀とりつく働く説付静形長刀説
俗説よ。去佐場ぞ堀川兼付乃ゝゝさ。静長刀をりつく多く
乃敵を切ふゝゝりぬ。此ふ法世ゝ乃刀乃象成仏ゝく
作ふと静形とふ
今按ふよ堀川兼付乃ゝゝさ。静長刀とりつく敵をぬせゝゝ
事。義經記盛衰記ゝゝ乃ゝゝぞ。俱〳〵鍛冶譜ふ濃州多藝
志津鍛冶志津三郎兼氏。後來相州爲正宗弟子。能作

長刀稱之世號志津象と云。そもそも志津形を造りて靜形と號す。堀川安付乃働すぐと附會せるものなり

○佐藤左司が家義經よりあくる後

佐藤は佐藤左司を嗣信忠信が父なり。二人の子孫義經よ奮せ〜めくのがせるふかあきくれ子どもが事をもてひちげさ。病とりしうど。素がはうひくこ二人乃婦は夫どもが繼をさせ。嗣信忠信を〜りといとせ。左司がんをなぐさむ。そなは左司死〜られだ。素は尼となりあるり〜が義經奥州よ落ゆまて〜ちさ。嗣信が子若君とちふ義經ふまちんこ。左司死〜ことせよねぶよ〜とついて。嗣信



忠信が事を語〜うば。弁慶八海すくく嗣信が戦死者為よて〜ぐのぬが働など紙信りし事ちおれを尼宮八海せを云

今按ふるに妄説なり。東猫を考ふるに文治五年七月軍朝奥州乃泰衡征伐乃ときさ。泰衡が郎従佐藤乃佐藤

嗣信忠信父

日嗣信忠信父奥〜。ふ紙故乃上よ陣をくるかのよ。籠金方より雲隠

冠者為家。同次郎乃主。同三郎資經。同四郎為家兄

弟四人を勢を率て。伊達郡澤爲ふちくこん。先陣せ

名ふて義を討かけるふ。左司以下一度よかうて戦

〜うば為主資經乃家三人を負傷ふく者おり。然

きどを為家ひろまるどせあるてうひまる花佐藤屋月
いとの長十八人一説あるうち死ととうとうり色とめて
俗説の相違を考へ知べし

○花乃おなぎまる紀の説

俗説云日向國塩田といふあり大古美といふ者一人のむすめ
あり花のおとなづく一説よい堀川大納言一説三枇杷左大臣一説三一条
住せるる一人のむすめ花乃おとなづくゆえ仲平といふ人をば國紫乃庄日型小田よ
かるち碁ごを美なり屋を接蓮よたり
て居るゆまるふいぢくとを男子来りてびそうふ彼
女よ通ど父母ままに従ゆて汝ゆりふ通へふいふ
人ぞと問むとゆうへて烏帽子を着るる男来く



来りてくうるとを聴よかるる。我を人のなを名ごとつふ。
毎むとゆよをへくうよ人四まるとを針をとりて等環
よたるねを男の衣襟よさ指とふを東伴乃男をとを
聴ゑ人ゑるよ乃びて女をりを名ゑりにさ。翌朝父母よつぎ芸
よ縁を名ゑるとく尋ゆくよ。月向世を伝乃さうひ嫗嶽
一書よい世を伝國入田卿祖母嶽とを乃窮よいるふ。窟中に痛吟のおるみ。あや
るんてゆまをとうて窟中よりるて我ハ芦花のなぐ
文なりと聴えの針顧よあるれるゆへよ疼痛甚ごと。我
まさふ子をべ。女ごたるあるる子を男呼んにて世よ聚る
勇士となるべ。一書よいるハ我ハ芦祖母嶽大明神なり。姿をうんで
るべとるふ。女をさりよ海ゆ。大神

ゆくまうんえていふく。なんぢうそうめるみごもる男児あるべし。氏ハ大神。名ハ
大太惟基と名づくべし。我ながく護神となるべしと云て窟に入ぬとあり。
女今一度まみえんとおもひしとゐをさくどもかれバ。大蛇と
らを窟よりつゞくるをそあやしさはかるべからぬ。左ぞらく匍匐
しつゝ窟中に死ぬ。是則姥嶽明神なり。一書ニ云ク祖母嶽明神ハ大己貴命也云々
女やうして男子をうむ。ぱくうち健よしてよく走る。脚より
胼胝多し。人呼て皸大童といふ。一書ニ弘仁二年三月五日男子を産む。神託によりて大太大
神惟基と号す。強力猛捷にして智謀あり。後よ豊後國を押領し世を従る号を　大童五世乃孫を尾形三
郎惟経といふ。一書ニ云。惟基ニ五男あり。嫡子ある知継三田井政次。二男阿南惟季。三男植田七郎季定。四男大野八郎基平。五男
臼杵九郎大夫惟盛といふ。惟盛より五代の孫緒方三郎惟栄と号すとぞ　惟経か男に蛇尾乃あるを以て
故よ尾形と号しけるとなり

と按ずるに妄説なり。但し舊事本紀に云。大己貴神　素戔烏尊子
天乃羽車に乗て。妻妾をもとむ節。渡縣にゆきて大
陶祇が女活玉依姫を妻とし。ひそかに往来して人これ
をしらず。古事記ニ云。活玉依毘賣其容端正也。於是壮夫ありて夜半に来る事あり。故に相感じて婚をなさずして　其美人妊身ことあり
女妊身によりて。父母あやしみて誰人来るやと
問。女こたへていふく。神人の形のよふに来るとのみにふせ
まどいふ。父母麻をはぐまて綜をつくり針をもつて神人
乃短裳にかけ。明旦絲にしたがひて尋ゆきむまで鉤乃
穴より出て節渡山を経。吾聟山に入。三室山にとゞま
る。大神なることを知る。その綜の遺りたる三わなれば。ふぐ

三繁ありぞよ　あよ三輪山ぞよ　大三輪神社ぞよ
姓氏録云。大神朝臣　素佐雄命六世の孫にして。大國主神　大巳貴云
乃後なりぞ。ぞめ大國を三後の溝杭耳乃女を擬姫を要る。要いまぐ
あをぞろにさろうつく畳つろうまいどとてよ　かかくらを擬姫　猿芋と祝よ
かを手であろふつうして　あるとしまで。茅渟縣陶邑を給ふ。をくう
大和國序紀をさやり。芋のつるをつんまぐ　日本紀云。崇神天皇
ぐ三ぐげありろれよりいく姫を大三繁と云
乃姫倭迹迹日百襲姫命を大物主の妻ととろれぞも
ろ神岩よ畫乃　こぞーろく　表ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
百襲姫　夫小箱に回ぞ。表常に畫まゐて　箸はざるかゆへよ
其　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
後へ明旦作ぞ　美麻乃威儀をゐん。大神ぞろ。言任
物　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ



おぞろく事みろれ。姫ぞのうちふあいをあーむぞろを
待ぞく猪筍をゐんまぞ美麻小蛇なりぞ。ぞ大ぞ蛇
乃ぞぞ。姫おぞろさけびなく。時ぞ大神ぞよ人乃形
よ化ぞぞ。ぞ蛇ぞよ渭ぞぞのぞまぞく。海ぞのびぞぞ器
をぞぞーめつ。我ぞぞ海をぞびーめんぞく。大虚を隙
で序渚ぞよのぞぞ。姫あぞゐんぞくあまぞ物ぞく箸を
ぞんぞく浅をぞぞて薨をぞぞとあり。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ
倭ぞよりのぞぞ。大神をあぞぞと別ぞろぞ。ぞりんぞこの略
ぞぞ。ぞ三和ぞぞ別ぞ。ぞでよ八咫史姫氏録ぞぞ天神
氏を載ぞぞ。ぞよ上古ぞりあれぞ。戰大言ぞ来ぞ氏

よいあくどゝ。又尾形のまゝ。源順の和名類聚抄にでよ
猪方ゴウのこと。猪方ゴウ中に尾形と訓同じくさ有よ。要用して
紀せるゆゑなんで。雌尾ビあるあるべくんゆゑとくへば富士
を不二ビとかまるぶごとく。他書にもしるべしるべ
あり。是ラ紙をつくる俗説のあやまりを知るべし



龍海堂